

## □ みことばに肩を揺すられて

ハガイ書は2章からなる小預言書ですが、日付を記しながら「この日、主が語られた」という確かな手応えを聴き手である私たちにもたせようと迫ってきます。ハガイの時代、再建に向かっていた主の宮は「廢墟」(1:4)となっており、みな「自分の家のために走り回っていた」(1:9)時代でした。「家」は建物のことだけを指すのではなく、私たちが起きてから眠るまで、生まれてから死ぬまでを過ごす場所であり、人生そのものとして受け取ってよい言葉です。「寝ても覚めてもあなたは自分のことだけにあくせく走り回っていた」と主は語られるのです。そして「あなたがたの現状をよく考えよ」(1:5, 7)と私たちの不要な枝に刈りこみをなさいます。人から「あなたは現実がわかってないのね」と言われればしばらく立ち直れないことでしょう。それと同じレベルで私たちは主から「現状をよく考えよ」というみことばを聴き取りたいと願います。なぜなら、みことばこそ、うなだれた民を「奮い立たせ」(1:14)、「強くあれ」(2:4)と私たち一人ひとりの肩を揺するようにして目覚めさせてくれるからです。

## □ きょうから後、祝福しよう

第六の月の一日から始まったハガイ書は第九の月の二十四日にクライマックスを迎えます。「きょうから後のことをよく考えよ」(2:15, 18)とそれまでの「現状」から過去を見つける時間軸の反対を見つめるように促します。確かにこれまでは「多くを期待したが、見よ、わずか」(1:9)であり、「手がけた物をことごとく雹で打」(2:17)たれるような徒労感に覆われていました。それでも、その苦難は主に立ち返るための道なのです。作家の C. S. ルイスは「苦しみは神のメガホン」と記しました。それは、苦しみの際、私たちは自分で叫びもがいてしまうのですが、実は神こそ、その苦しみの中から「わたしに帰って」(2:17)来るように叫んでおられるのです。結びで「きょうから後、わたしは祝福しよう」(2:19)と約束を断言しておられます。「きょうから後」という言葉には私たちの将来が込められています。それは凶作続きのまっただ中に「種はまだ穀物倉にあるだろうか（わずかであっても！）」(2:19)と真剣に語り、立ち枯れて黒穂病で無残な姿になっているぶどうの木々に向かって「実を結ばないだろうか（いや、結ぶ！）」(2:19)と言われているのです。神さまは私たちがどんな姿、状態であろうと小馬鹿にされません。むしろ、わずかであっても真剣に、多くはなくても確かに主のみことばと約束を信じる者に祝福を注いでくださいます。